

## 写真展 『町の顔』

数年前、若柳朝市にカメラを持って赴いた時に、南三陸町から来た海産物を販売する女性に写真を撮って欲しいと声をかけられたことがある。聞くと、津波に家を流されて全てを失い、自分が写っている写真が一枚も残っていないので撮って欲しいのだ、と。その時は新聞、テレビでは伺い知ることの出来ない津波被災者の喪失感の一端を垣間見たように思った。と同時に顔が写っている写真というものの持つ意味をあらためて考えさせられ、人物の顔こそを写真の主題とすべきではないかと考えるようになった。顔の写真とは私達にとって生存の証となるものであり、津波被災者の女性が撮影を頼んできたのはつまりそれを無くしたからに他ならない。

さて若柳朝市について、なぜ多くの人がそこに訪れるのかということに私は関心を持つようになった。その朝市が開かれる場所はかつて小学校があった場所であり、ある年代以上の住民は皆そこに通り、子供時代の多くの時間をその場所でも過ごしたという馴染みの深い場所である。私の思い込みであるかもしれないことを承知で言うと、その場所への記憶が多くの人が朝市へと向かわせているのではないか？私達の中にその場所は人々が集う場所であるという記憶が消しがたいものとして残っている。

場所の記憶という点では中町商店街も同様で、そこに私達は頻繁に足を向かわせた。若柳で最も馴染みのある場所である。

このようなことを考える中で私は若柳の人々の顔の写真を中町に展示することを思いついた。若柳の人々の意識の中におそらく特別な場所としてあるであろう中町に、現在若柳に住み、又は若柳で活動する人々の写真を展示するということ。これはちょっと面白いかもしれない。川北交流広場の住所が「若柳川北中町一番」であることを私は最近になって初めて知った。つまりこの場所が若柳の真ん中の地区の一番地なのである。この場所に若柳の人々の写真を展示することは意義のあることではないか。

今回の展示は私自身の顔を撮るという主題とこの若柳という場所の記憶という二つの要素が基となって行われる。

写真展の実現に向けて中町の菊地聡さんに多くのことを相談し、多大な協力をいただいた。感謝を申し上げる。